打越正行著

『ヤンキーと地元

——解体屋，風俗経営者，
ヤミ業者になった
沖縄の若者たち』

評者：杉田　真衣

本書の概要

本書は，沖縄の下層の若者たちを対象とした10年にわたる参与観察・インタビューをもとに，かれらがいかに地元を経験しているのかを明らかにした秀逸なドキュメントである。出会った時に暴走族やヤンキーだった若者たちは，2017年には「サラ金の回収業，金融屋の経営，スロットの台打ち，性風俗店の経営，ボーイ，型枠解体業，鳶，塗装，左官，彫師，バイク屋，ホスト，キャバクラ嬢，弁当屋，主婦」になっており，消息不明や刑務所在所中の若者もいた（p.17）。こうした若者たちと「つき合ってきた，あるいは，つき合ってもらった記録」（p.18）をもとにすることで，部外者が容易にはアクセスできないかれらの労働と生活を内側から記述することが可能となっている。

第一章「暴走族少年らとの出会い」には，著者が研究をおこなうに至った経緯，自分に沖縄のことが語れるのかという葛藤や，いかにして若者たちの信頼を得てかれらの話を聞かせてもらえるようになっていったかが綴られている。沖縄で調査を始めた時に最初に向かったのは，当時ほとんどの中学につくられていた暴走族がバイクを走らせていたゴーパチ（国道58号線）であった。著者は，原付バイクで追走したり，警察の職務質問を受ける様子を見られたり，かれらの「パシリ」（使い走り）になったりしながら，かれらとの関係を築いていった。

かれらの地元での暮らしに関心を持った著者は，T地区の型枠解体屋「沖組」で働き始める。

第二章「地元の建設会社」はその参与観察の記録である。建設現場では「しーじゃ」（先輩）と「うっとぅ」（後輩）の関係が作業効率よりも優先され，その上下関係は土曜の夜に繰り出す街でもそのまま行動原則とされていた。かれらは中学卒業後，暴走族の先輩のいる建設会社に入り，先輩に時に暴力をふるわれながら仕事を覚え，仕事の場以外でも先輩の雑用係を引き受けながら下積み時代をすごす。4～5年働けば一人前になり給料も上限に達するが，先輩の側に回って後輩を従わせられるようになるので辞めない。興味深いのは，この上下関係は従業員間の関係を安定化させ，技術の継承も可能にするため，会社にとっても都合がよいことである。しかし，建設業の需要の縮小によって新人の採用が減り早期離職が増えたことで，上下関係には揺らぎが見られたことも指摘される。

第三章「性風俗店を経営する」には，洋介がセクキャバ店「ルアン」を開いてから閉じるまでが記述されている。先輩から暴力をふるわれるのを嫌う洋介は暴走族には入らず，高校中退後は同世代の地元の友人たちとバイクを改造したり一緒に走ったりしていたが，その後「キセツ」（「内地」への出稼ぎ）に行き，収入の額が募集時に示されていたよりもはるかに低くされるという経験をする。この社会では「上のヤツが持ってく」と思い知り，次は自分が「上に立つ」と決意する。セクキャバの受付の仕事から始めて下積みをし，独立してからは地元つながりを通じて業界の情報の収集や従業員の採用をした。こうして逮捕されない経営の仕方を摑ん

でいったが，警察の「ガサ入れ」があって休業に入ったあと店自体を閉め，「昼の仕事」の経営者へと移行した。

第四章「地元を見切る」には，小学校にも中学校にも行かず地元K地区の先輩たちとすごし，中学生の時から建設現場で働いた勝也が，中学を卒業して左官屋で働き始め，鳶の仕事を経て内地へと向かうまでが描かれている。勝也も第二章のT地区の建設業の若者たちと同じように「しーじゃとうっとぅ」の関係を重視していたが，かれらと違うのは他の地区の先輩と接する際にも，自分は上下関係をわきまえていると示そうとしていたところだ。K地区では仕事も遊びも地元つながりの内に完結せず，より拡がりがあるつながりの中にあったので，地元内部の統制はT地区ほど厳しくなかった。先輩の経験値の継承もT地区ほどにはされておらず行動基準にはばらつきがあり，20歳になる頃にはそれぞれが辿る軌跡はかなり分岐していた。

第五章「アジトの仲間，そして家族」では，T地区の暴走族がバイクをしまい「アジト」と呼んでたまり場にしていた倉庫にいた良夫と良哉，そしてゴーパチで一緒に暴走族見物をしていたサキとエミの履歴が描かれる。紙幅の関係で詳細は省くが，前章までに描かれてきたアジトやゴーパチという，若者たちがつくりだした場が，特定の地域に限定されない若者たちの一時のよりどころともなっていた様子を描き出している。

若者たちの生の総体の描出

本書の一番の魅力は，労働だけでも，生活だけでもなく，それらが絡み合う若者の生の総体を描き出すことに成功していることである。それは著者が長い時間を若者たちとともにすごせたことで可能となっている。たとえば沖組の参与観察では，自らも建設現場で働いてその労働のありようを詳細に記述しているが，それだけでなく金曜の夜に歓楽街へとともに繰り出すことで，かれらの恋愛・性愛や家族形成も記述している。だからこそ，「しーじゃとうっとぅ」の上下関係が建設現場での労働と週末の生活の両方を貫いて存在し，かれらの行動に強く影響している様子が浮かび上がっている。

どこにも行けないという閉塞感

評者にとってとりわけ勉強になったのは，著者がかれらの時間感覚や身体感覚を自分でも摑んでいったところである。

著者は，かれらとともにすごし，服の選び方や髭の剃り方を教わったり，おにぎりや天ぷらの選び方がなってないと叱られたりしながら，「一緒にいてもいいような作法を身につけようとし」，そうする中で「自分が偏った見方，感じ方をしていることに気づかされ，修正する機会を何度も得ることができた」という（p.56）。とりわけ強く印象づけられたのは，建設現場で働く時の時間感覚に関わる記述である。著者は次のように述べる。

> 現場の士気を上げようと，「あと三〇分で昼飯だ」などと，まわりの従業員によく声をかけたが，その都度，「時計みずに働け。時間の話はするな」ときつく言われた。仕事に慣れた従業員は，作業がつらいとか，なかなか終わりの時間が来ないといったことを意識せずに済むよう，自分の感覚をわざと麻痺させているようだった。（p.98）

敢えて見通しを立てないことが，厳しい作業が延々と続く仕事をするために必要な方法なのである。また，月曜が憂鬱で金曜・土曜には高揚感があるというように，曜日は意識するよう

になる一方で，季節，暦，祝日を意識することはほぼない。月曜から金曜・土曜までの労働と土曜の夜の歓楽街での時間とが合わさって１週間単位で時間が流れ，それがただひたすらに繰り返されていくというのが，かれらの日々のありようだ。そのようにして働き続けられたとして，４～５年働けば一人前になり，給料の額は打ち止めとなる。かといってよりよい仕事があるわけでもない。日々の労働と生活においても先を見通すという時間軸の立て方は適さず，勤続年数を重ねても将来展望が描きにくい――このような状況が身体感覚を伴って摑まれ，記述されることによって，かれらのどこにも行けなさ，閉塞感が伝わってくる。さらに言えば，そこには暴力が溢れているものの，「しーじゃとうっとぅ」の関係は，ままならない日々を自分たちの世界へと変換するためのかれらなりの格闘の産物でもあるのかもしれないと，想像されるのである。

暴力をふるう男性の側の物語

もう一点，特筆するべき本書の特徴に，男性の後輩や女性の交際相手・配偶者に暴力をふるい，経済的に搾取する男性たちの姿を，その背景とともに記述していることがある。著者はかれらの暴力について，「個人の人格によっても，あるいは『男らしくあれ』という周囲からの圧力によっても，十分には説明できない」（p.17）と指摘する。そして，暴力を発生させる「しーじゃとうっとぅ」の関係が地域でどのように機能していたかや，かれらがいかに保護者の暴力にさらされ，学校からも排除されたかを明らかにしている。

著者はかれらの暴力や搾取に対して，簡単に審判しない。かといって，ただ話を聞いているだけでもない。たとえば，仕事をせず妻の収入でパチンコ屋に通った期間があったという仲里に対し，「バカ野郎ですね（笑）」（p.16）と話している。また，著者が家族と別居していた時に，仲里や太一は自分たちの離婚経験からそのつらさに共感し，励ましてきた。このようにして，緊張関係にありながらもかれらとともにあろうとし続けたために，かれらの語りが生まれて，その現実を描き出せたのだろう。

くわえて，父親が母親に暴力をふるう人だったから自分は妻に同じことはしないと語る勝也など，暴力をふるわない男性の存在も描くことで，男性像の固定化を回避している。夫，交際相手や父親に虐げられたサキとエミが，自分が望む家族を着実につくっていく姿も描くことで，若者の描写の奥行きはさらに増している。

「地元つながり」の差異

以上のように若者たちの生の秀逸な記録となっている本書を読んで，さらに知りたくなったことがある。「地元つながり」としてカテゴライズされている関係の中の差異についてだ。本書ではそれぞれの若者にとっての「地元」が描かれていて，そこには違いがある。先述したように，第二章のＴ地区の沖組の若者たちと第四章のＫ地区の勝也は，地元の暴走族を経て建設業の仕事へと参入し，「しーじゃとうっとぅ」の関係を重んじるという点では共通していたが，Ｔ地区よりもＫ地区のほうが地元内部での統制は緩い。その大きな要因として，Ｔ地区には核となる建設会社が存在していることが挙げられており，この分析には説得される。

一方，第三章の洋介は暴走族に属さず，エイサー青年団の練習にも行かずに，地元の先輩から距離をとっていた。ただ，暴走族には入らなくても地元の同世代の友人たちとバイクで一緒に走るのを楽しみ，若い時は先輩に従わないと地元にいられなくなるので先輩との関係を絶ったわけではない。そのため，風俗店を経営する

にあたって「地元つながり」を上手に使って情報を仕入れたり従業員を雇ったりすることができた。それと同時に，「地元も世代も多様で，互いに情報を共有できる程度の関係が作られていた」性風俗業の世界で，「建設業で働く者とは異なり，世代や地元つながりを越えた関係を築いて」もいたという（p.195）。先輩と一定の距離をとるという洋介のあり方が，性風俗業の世界と適合するところがあったということなのかもしれない。とはいえ，①洋介が地元の先輩とある程度距離をとりつつ，暴走族には属さない同世代と友人関係を形成していたこと，②洋介が「地元つながり」を足がかりに風俗店を経営していたこと，③性風俗業で世代や地元つながりを越えた関係が形成されていたことの３つは，どのような関係にあるのか。たとえば暴走族には入らず自分たちで好きにツーリングをしていた同世代の友人たちと，暴走族へと参入していった少年たちとが分岐した背景には何があり，歳を重ねていっても両者の間には交流はなかったのか。洋介に対して理不尽な暴力をふるった先輩と，風俗店経営に有益な情報をもたらした先輩とは，どれくらい重なっていたのか。ボーイとして雇った後輩とはどういった場でどのように関係を築いてきていたのか。詳細なドキュメントだからこそ描き出された洋介の入り組んだ人間関係はいかにして読み解けるのかということに，強い関心を持った。それを読み解くことで，本書が描き出している複層的な地域社会のあり方への理解がより深まるのではないかと考えたからである。

事実認識の記述の仕方

最後に，瑣末なことかもしれないが，事実の記述の仕方のことに触れたい。調査対象者の語りを引用するとき，その語りについて地の文でどのように記述するかは，悩むところである。書く者の立場が読み手，とりわけ調査対象者から厳しく問われるからだ。

本書では語りにおける口語がそのまま地の文でも使われていることがある。多いのは近しい人の呼び方で，「奥さん」（p.65，p.69〔，p.75〕沖組の社長の妻，p.129 達也の妻，p.213 勝也の妻），「親父」（p.211 勝也の雇用主），「おじー」（p.269 良哉の祖父），「旦那」（p.286 サキの夫）である。沖組の「奥さん」は，著者自身が呼ぶ通りに書いただけだろう。「おじー」は祖父一般をそう呼ぶにすぎないのであろう。調査対象者のそばにいる者として同じ表現を敢えて使ってもいるかもしれない。ただ，「奥さん」と「旦那」は，ジェンダー視点からその是非が問われてきた言葉でもある。言葉尻を捉えて機械的・表面的な指摘をしたいわけでは毛頭ないが，引っかかりを覚えはした。

「ヤク中（覚醒剤中毒者）」（p.172）と「シャブ中」（p.236）という表現もある。これらもまた，かれらとともにある者として使っていると想像される。当事者が自分たちのものとして使うなど，言葉が用いられる文脈を考える必要もある。本書には交際相手から薬物使用を強いられ自殺に至る真奈などが登場し，他の論文でもかれらの薬物使用をめぐる厳しい状況を明らかにしている著者は薬物に関する理解が深いので，考えがあってのことでもあるだろう。それでも，「依存症」ではなく「中毒」やそれを表す「中」という語が使われることに全く抵抗がないわけではない。

また，著者は沖組の社長の「公務員は，自分たちは生活かかってないから，基地反対とか言うんだよ」といった批判を，「彼は，米軍基地との共存も選択肢の一つとしてあげ，地元の人間の生活を軽視する基地反対派，そしてその象徴としての公務員を批判した」とまとめている（p.76）。この部分では，社長が基地反対派や公

務員を「地元の生活を軽視する」存在として認識していることを記述しようとしているのか，それとも基地反対派や公務員が「地元の生活を軽視する」存在であることは（著者にとって）既定の事実であり，そのような基地反対派や公務員を社長が批判していることを記述しようとしているのかがわかりにくい。もちろん，社長は沖組が倒産の危機にあった時に税務署が会社の存続よりも税金の徴収を優先したことに憤ったと書かれており，社長が公務員批判へと至った背景がわかるようになっている。とはいえ，上述の認識の構図があくまでも社長のものであることを示したいのであれば「基地反対派を地元の人間の生活を軽視する存在として批判した」というような書き方もあり，そうはなっていないことからは，著者自身の事実認識が反映されているのかもしれないとも推測される。

ここで挙げてきたのは，かれらの世界に内在して書いたのか，それとも著者自身の認識をも表しているのかが判然としない箇所である。調査対象者が語ることをどのように記述すればいいのか，評者自身悩んできた。とくに，調査対象者の事実認識と評者自身の事実認識が異なるときに，その悩みは一層深まった。振り返ってみれば，評者は調査対象者の認識については，それが生成された背景もできる限り描き込んだうえで，それはあくまでかれらの認識であるのだとわかるような書き方をしてきた。その是非も含め，事実認識の記述と，それと深く結びついた調査者と対象者との関係について，議論させていただきたいと思った。

（打越正行著『ヤンキーと地元――解体屋，風俗経営者，ヤミ業者になった沖縄の若者たち』筑摩書房，2019 年 3 月，304 頁，定価 1,800 円＋税）

（すぎた・まい　東京都立大学人文社会学部准教授）